令和５年度 第３回 北海道総合開発委員会計画部会　議事録

日時：令和６年１月24日（水）10:00～12:00
場所：第二水産ビル ４Ｓ会議室

〇出席者
〔委員・参与〕髙橋部会長、石井副部会長、岡田委員、加藤委員、川村委員、佐藤委員、中村委員、水野委員、古地参与　　９名出席
〔北海道〕三橋総合政策部長、笠井計画局長、佐々木計画推進課長、笹森地域戦略課長

（佐々木計画推進課長）
定刻となりましたので、令和５年度第３回北海道総合開発委員会計画部会を開催いたします。
私は計画推進課長の佐々木です。本日はどうぞよろしくお願いいたします。
開会に当たりまして、総合政策部長の三橋より御挨拶申し上げます。

（三橋総合政策部長）
皆さん、おはようございます。総合政策部の三橋と申します。
本日第３回目となりました北海道総合開発委員会計画部会を開催に当たりまして、一言御挨拶を申し上げさせていただきます。
本日御出席の皆様、委員の皆様におかれましては、大変お忙しい中、御出席いただきまして本当にありがとうございます。なお、本日、ご承知のとおり暴風雪警報が発令されております。御出席いただきました委員の皆様の中には道内各地から御出席された方もいらっしゃいますので、この後の交通手段の状況等も踏まえまして、決して御無理なさらずに御出席いただければと思っておりますので、どうぞ、よろしくお願いいたします。
前回、11 月に第２回の部会を開催させていただきました。前回の部会では、計画の素案を議題とさせていただいて、めざす姿、あるいは、政策展開の基本方向、地域づくりの基本方向、こういった分野について御議論をいただきました。めざす姿につきましては、「北海道の力が日本そして世界を変えていく、一人ひとりが豊かで安心して住み続けられる地域を創る」、こういった方向で進めていくということを御確認いただいたところです。
本日は、そのめざす姿を踏まえまして、具体の政策展開の方向性、考え方について、部会の皆様の御意見、さらには、この間、道内の市町村の方々にも御意見を伺っております。こうした御意見を踏まえて、今回、原案の事務局案ということで、たたき台として取りまとめをさせていただいたところです。是非、この内容について御審議いただければと思っております。
委員の皆様におかれましては、忌憚のない御意見や御感想をいただくようにお願い申し上げまして、開会に当たりましての私の御挨拶とさせていただきます。
本日はどうぞよろしくお願いします。

（佐々木計画推進課長）
本日の会議の出席状況についてでございますが、９名全員の出席となっております。北海道総合開発委員会条例施行規則第４条第１項及び第５条第６項の規定によりまして、部会が成立していることを御報告申し上げます。
本日の会議は、報道機関を含めまして、公開での開催とさせていただいております。また、議事録につきましては、後日、ホームページで、発言者のお名前入りで公開させていただきます。
会議資料は、お手元に配付しておりますが、会議次第、出席者名簿のほか、会議次第の下に記載しております、資料１から３、参考資料１から３までとなっております。適宜御参照くださいますよう、お願いいたします。
それでは、ここからの議事は髙橋部会長にお願いいたします。

議題（１）原案（事務局案）について」

（髙橋部会長）

それでは、事務局の方からお話がありましたとおり、天候がどうなるかわかりませんので、挨拶抜きで進めさせていただきたいと思います。

本日の部会の所要時間は２時間ぐらいを予定しておりますので、御協力のほど、よろしくお願いいたします。

本日の審議事項は、次第にありますとおり、議題１、新たな総合計画（原案・事務局案）についてでございます。

最初に、議題１について事務局から一括して御説明いただいて、それから皆様に御意見をいただきたいと思います。

（佐々木計画推進課長）

本日の議題の審議に当たっての資料ですが、資料１が新たな総合計画（原案・事務局案）の取りまとめについて、「素案」からの主な修正点でございます。資料２が計画（原案・事務局案）の本文、資料３が本文の素案からの見え消し版でございます。参考資料の１つ目が、指標に関する目標値の考え方などの説明、２つ目が、昨年 11 月から 12 月にかけて実施しました計画素案に関する市町村への意見照会の結果、３つ目が前回の計画部会の議事録でございます。

この度、昨年 11 月に第２回計画部会での御審議をいただき、とりまとめた計画素案から事務局案として原案を整理いたしましたので、資料１「新たな総合計画（原案・事務局案）の取りまとめについて」により、御説明申し上げます。

資料１をご覧ください。まず、計画原案に向けましては、北海道総合開発委員会や市町村の御意見、道議会での議論、道の特定分野別計画の策定や改定の検討状況などを踏まえて、「検討中」としていたものの追加や記載の修正を行いましたので、以下、素案からの主な修正のポイントを御説明いたします。

まず、「第２章　北海道の「めざす姿」」では、北海道を次の世代に引き継いでいくという、めざす姿を掲げる考え方や、めざす姿の実現に向けた政策展開と地域づくりの基本方向の考え方を明確化いたしました。

「第３章　政策展開の基本方向」の政策では、１つ目としては、素案で検討中としていた「デジタル」についての記載を追加したほか、「観光」、「グローバル化」、「社会経済基盤の整備」などの記載内容について、計画部会での御指摘等を踏まえて修正いたしました。

また、素案では項目のみを示していた指標に関しまして、10 年後の目標値を設定するとともに、今回新たに、５年後の中間目標値を設定したほか、計画部会での御議論を踏まえ、めざす姿の実現に向けた進捗状況をわかりやすく把握できるよう、指標のうち、本道のポテンシャルの発揮やや人口に関連するものを「重要モニタリング指標」として新たに位置付けてございます。

「第５章　計画の推進」では、計画推進に当たり、道職員の計画趣旨の十分な理解に努めていくこと、共通認識の下で地域の課題や実情を的確に把握し、市町村等と連携を強めながら取り組む旨の記載を追加しております。このほか、各章全般において、より適切な表現に修正を行っております。

２頁以降では、各章の追加・修正内容の概要を整理したものでございまして、そこに計画本文の資料３の見え消し版に対応する該当頁を付記しております。併せて御覧いただければと思います。

まず、「第２章　北海道の「めざす姿」」の「北海道を取り巻く状況」でございますが、【人口減少・少子高齢化の動向】について、４頁、７頁になりますが、振興局別の若年層の人口推移や将来推計人口に関する図表などの追加しております。

次に 16 頁が【エネルギー】についてということで、様々なエネルギー源の特性を活かした構成の重要性に関する記載を追加、これは、対応する政策展開の基本方向にも追記してございます。これは 41 頁にございます。また、ＧＸに関する国内外からの北海道への投資促進の必要性に関す

る記載の追加。
続きまして、【デジタル】については、ラピダス社の立地を契機とし、本道経済全体の成長に結びつけていくことの必要性に関する記載の追加、これは17頁。
また、「２　計画のめざす姿」では、25 頁以降になりますが、めざす姿を掲げる考え方や、めざす姿の実現に向けた政策展開の考え方を明確化するとともに、３つの基本方向に共通して重要な人材の育成・確保対策の推進について明記してございます。
次に、３頁「第３章　政策展開の基本方向」でございます。こちらは 29 頁以降になりまして、指標について、一部、検討中のものもございますが、107 の指標と、その中間目標値、目標値を設定し、その指標のうち、本道のポテンシャルの発揮や人口に関連するものを「重要モニタリング指標」として新たに位置付けております。第３章の冒頭に記載しております。
計画本文の資料の巻末に、附属資料として考え方と一覧表を載せております。なお、コロナ禍の影響などの特殊要因を受けている指標は、直近統計としての現状値に替えて、平年の傾向値などを記載しております。
また、お手元の参考資料１「新たな総合計画における指標」に、個々の指標についての説明や目標値設定の考え方などを掲載しております。この資料は、検討中の指標が２割ほどあるほか、目標値設定の考え方の説明ぶりについて引き続き精査が必要なことから、本日時点の参考資料としてお示ししております。
次に、政策の柱についてですが、「現状・課題と対応方向」及び「政策の方向性」について、必要な記載を追加・修正しております。主なものとしまして、１番目の「潜在力発揮による成長」の【１（１）食】です。これは 36 頁になりますが、道産食品の輸出に関し、拡大を図る品目の例示や推進体制について記載を追加しております。
38 頁から 40 頁、【１（２）観光】でございますが、観光需要の本格的な回復基調や本道観光を更に伸ばし、持続的な発展につなげていく必要性などを踏まえまして、全体的に記載を追加・修正しております。
【１（３）ゼロカーボン】、43 頁あたりですが、再生可能エネルギーの最大限の活用やエネルギーの安定供給に関しまして、道内へのＧＸ投資の促進について記載を追加しております。
【１（４）デジタル】、45 頁から 46 頁辺りですが、新たに策定する「北海道半導体・デジタル関連産業振興ビジョン」の素案を踏まえ、新たに記載してございます。
続きまして、４頁目、「２　誰もが可能性を発揮できる社会と安全・安心なくらし」です。
【２（１）子ども・子育て】、資料３では 53 頁から 54 頁辺りになります。これは 12 月に決定いたしました「こども大綱」が目指す「こどもまんなか社会」の趣旨や、大綱の基本方針に関連する記載を追加しております。【２（２）教育・学び】、これは 57 頁辺りですが、学ぶ機会の保障に関し、地域における質の高い教育の確保、遠隔教育の取組推進、社会人の学び直しや多様な背景を持つ人々のニーズに応じた学習機会の提供について追加しております。
資料１の５頁目ですが、「３　各地域の持続的な発展」です。これは、【３（２）グローバル化】、これは70 頁から 71 頁辺りですが、国際情勢の変化や本道の労働力不足などにより本道に居住する外国人が増加していくことなどを踏まえまして、全体的に記載を追加・修正しております。
【３（４）社会経済の基盤整備】、これは74 頁から 77 頁辺りですが、ここでは、鉄道、バスなどの地域交通の確保に関しまして、厳しい事業者の経営環境や全道各地域の路線の状況などを踏まえ、具体的な政策を明示するよう、全体的に追加・修正しております。
次に、６頁「第４章　地域づくりの基本方向」では、これは 85 頁以降でございますが、「■地域づくりを進める基本的な視点」をおきまして、外国人も地域社会の一員であるという考え方について、記載を追加しております。
最後に、「第５章　計画の推進」のうち「３　計画の推進管理」において、これは 100 頁になりますが、毎年の点検・評価について、地域の課題や実情を踏まえ実施することを追記したほか、計画の見直しについて、見直しを行う内容として、「政策の方向性や指標など」と具体的に記載しております。さらに、「４　計画の推進体制」において、道職員一人ひとりが、総合計画の趣旨を踏まえ、地域の課題・実情の把握や、市町村をはじめ様々な関係者との連携強化に取り組む

ことについて記載を追加しております。事務局からの説明は以上でございます。

（髙橋部会長）

はい、ありがとうございました。それでは、これから議論を進めていきたいと思いますが、少し議論を分けて、皆様から御意見いただきたいと思います。

最初に目次でいくと、第１章から第３章まで、計画の考え方、計画のめざす姿、指標も含めた形で、政策展開の方向性を一つのまとまりとして、皆様から御意見いただきたいと思います。

今の事務局からご説明いただきましたとおり、第２章においては、めざす姿、目的の明確化、しっかり書いていただいております。さらには第３章、政策展開の方向性については、前回の計画部会の御意見を踏まえた形で修正を行ってございます。特に指標に関して位置付け、さらにはこれから政策展開をどう進めていくかというところを、今回、是非皆様から御意見いただきたいと思ってございます。

それでは、いつものとおり、石井委員からよろしくお願いします。

（石井副部会長）

まず取りまとめ、非常にご苦労されたのかなと思っており、ありがとうございます。かいつまんで言いますけれども、まずは印象ということで、全部を読むとなかなか大変なので、25 から 30 頁あたりが、しっかりと読み物として、読んだ時に道民の方に伝わる、ここに真髄が詰まっているという風に最終的になればいいのかなと思ってのコメントなのですけども、今回、26、27 頁辺りで、政策の基本方向というところに少し文章が追加されて、地域づくりの方も文章が追加されているということで良いのかなと思います。29 頁ですけど、ここですよね。今回、重要モニタリング指標ということで、新たに追加された部分ですけれども、29、30 頁、非常によくまとめられているので、何かこう、さらに付け足して書いてくださいと、なんかちょっと言いづらいところもあるのですが、あえて言うと、なぜ重要モニタリング指標、この指標として、なぜ重要モニタリングをやるのかということと、なぜこの指標なのだというところを、少し説明を加えた方がいいのかなと思います。

私が重要というのは、この色々な施策がある中で、より総合的なものを捉えているだとか、あるいは、めざす姿の「北海道の力が日本そして世界を変えていく」「一人ひとりが豊かで安心して進み続ける地域を創る」というのを評価するのに非常に適しているだとか、あるいは、これからＰＤＣＡを回していく時に、非常に ing 系で、要は、ぱっぱっぱっと見ていかなければいけないもの、ゆっくりではなくて、何というかモタモタしていられないもの、機動的に見ていかなければいけないものだから重要なのだというような、そんなような単なる進捗状況を道民にわかりやすく発信するためではなくて、なぜこれが重要なのだっていうようなところを少し強調していただけるとありがたいかなと。

そういった面で、道内総生産、今、［検討中］とありますけれども、これは是非、デジタル分野も含めてこれから成長が求められる分野だと思いますので、何か ing 系で、是非とも評価していただきたいなと思います。

それから、私、必ずしも専門ではないですけれども、社会の増減数、これも後ろを見ますと、（目標値に）０という数字が並んでいたと思うのですけれども、これもできれば、めざす姿なので、０ではなくて、何かプラスの値がいいのかなという気もしますし、健康寿命に関しても、後から見ていただけると、専門の方フォローしていただければと思うのですけれども、これも、全国値ではなくて、現状からちょっと伸びてくるみたいな感じだったので、めざす姿はやっぱり全国平均だろうとか、なんかその辺の、なんか少しこう現状というのと、めざす姿というのは、少しこう野心的に書けるところは書いてほしいかと思います。

それから、再生可能エネルギーの導入量の件に関しても、本当は二酸化炭素排出量が削減されるという方が、僕はより総合的なものと考えるのですけれども、より機動的なもので言うと、再生可能エネルギーの設備容量になってしまうのですよね。どうしても国の統計から２年遅れとか、あるいは１年遅れのものが、速報値でしか出せない状況を見ると、より ing 系のものという

ことであるならば、と理解しました。一応、二酸化炭素も検討してほしいのですけれども。
それから、ちょっと分かりづらいのが、企業立地件数ですかね。45 頁目に、「リスク分散による企業立地件数」という指標、これデジタルの分野ですね。それからもう 1 つ、50 頁目にも、産業活性化・業種横断分野のところにも、指標に「企業立地件数」って、２つあるのですよね。これ、どっちかなっていうのが疑問なので、整理された方がいいかなと思うのと、ing 系っていう風に見るならば、特出しして、デジタル分野の（企業立地件数）とかなのかなとか、ちょっとその辺もご検討いただければ、よりわかりやすくなるのかなっていう風に拝見しました。一方で、企業立地件数というのは、デジタル分野に限らず、どの企業の立地件数大事だよねという見方もあろうかと思いますので、その辺はちょっと内部でご検討いただければなと思います。
それから、ちょっとこれから細かくなるのですけれども、食料の輸出のあたり、35 頁目あたりですかね。こちらも、多分、中国との関係で検討中とのことを、何度か道庁さんからお聞きしているのですけれども、リスク分散をして輸出拡大を進めると 36 頁にも書いていますので、できれば前向きな数字ですね、検討中のものを入れていただければなと思います。
それから、これは大事なのですが、42 頁目に木質バイオマスエネルギーの利用量というのが、赤印なので新たに追加されたのかなと思います。今、全国的にもそうなのですけども、木質バイオマス発電は、必ずしも国内林、道内林だけではなくて、輸入材あるいはＰＫＳ（パームヤシ殻）などの輸入のバイオマスを、輸入しているということがあります。今、世界的に、木質は、いわゆる第三者認証制度みたいなのが少しずつ出てきていて、これはサステナブルだ、これはサステナブルではないという評価がされます。すなわち、ＰＫＳがちょっと怪しかったりとか、あとは、植林を伴わない伐採は本当にサステナブルなのかといった話がありますので、ちょっとその木質バイオマスエネルギー利用量を、どんどん数字が上がっていくことに関して、これは道内産のものなのか否か、あるいはサステナルで増やしていくのだよね、みたいなところが、例えば 43、44 頁目あたりに追記して、文章があると、補足になるのかなという気がいたしました。ちょっと木質に関しては今、少しずつ状況も変わりつつありますので、丁寧にちょっと調べていただいて、書いた方がいいかなと思いました。
それから前回、かなりの長い時間を使ってコメントさせていただいた 79、80 頁目の自然・環境の辺りは、これは計画推進課のご尽力で、私も道庁の循環型社会推進課とちょっと議論させていただきまして、一応、課題、現状の問題の共有ですね。それから、こういうような施策みたいなところは一緒に議論させていただいて、こういったような文章になって、私としては、これで良いのかなと。指標もバイオマス利活用率というのも、ここに入れていただいたので、私としてはいいかなと思います。ちょっと長くなりましたが、以上です。

（髙橋部会長）
指標を中心にご指摘いただきまして、どうもありがとうございます。特に 29 頁の重要モニタリング指標、ここが今回の計画における新たな視点なので、この辺りをしっかりどう書き切るかというところがポイントかなと思いますので、ありがとうございます。
では続きまして、岡田委員、お願いいたします。

（岡田委員）
大変な作業をどうもありがとうございます。 そして、このめざす姿を掲げる考え方、「北海道を次の世代に引き継ぐ」ということを明確化されて、これは、若者の視点なども、もっと入れた方がいいという今までの声を反映させたものであろうかと思います。
それで、この姿勢が、私、第３章の２番のところについてコメントしたいのですけれども、見え消し版の頁でいうと 52 頁ですね。まず、北海道を次の世代に引き継ぐということは 27 頁のところに書かれていまして、そして、この基本方向のもとに、52 頁もまた書き加わっていると思います。18 行目から新しい記載があって、先ほどご説明がありました「こどもまんなか」という言葉が出ていて、この姿勢はよくわかります。ただ、この文章だけを読んだ時に、ちょっと違和感がありまして、「大人が中心となっている社会をこどもまんなかに変えていく」と、ここで突然

出てきているのですね。この大人が中心となっている社会をこどもまんなかに変えていくと、あまりにも大きすぎて、ここの説明をもうちょっとしていただきたいなと思います。例えば、「子どもに関連する施策を展開するに当たって」とか、あるいは「次世代へとつながる施策に関連しては」とか、そうでないと、北海道の方針は「こどもまんなか」なんだっていう誤解も受けかねないかと思います。

それで、その後の記述なのですけれども、子ども施策を共に進めていく必要がある、だからそのために子供、若者の権利の主体として尊重するという、この繋がりもちょっとわかりませんで、子どもが権利主体であるということは、日本も子どもの権利条約に批准していますから、もうそれは当然の前提であるので、ここの記述は、「権利主体である子ども、若者の表明する意見を尊重し、その最善の利益を第一に考え」という流れになるのかなという気がします。

あと、同じ頁で、上の方９行目から、合計特殊出生率のことが書かれています。前回の部会で、加藤委員が「合計特殊出生率というのは、これは指標ではなく結果だろう」と発言されていたのを聞きまして、ああ、なるほどと思って聞いていたのですけれども、ここも記述の仕方次第で変わるのかなっていう気がします。で、今の記述は、９行目から 11 行目ぐらいまで、「北海道は出生率が低い」となっていて、「低い、だから取り組みを一層強化する」という書き方になっているんですね。この書き方が、もう産めよ増やせよが至上命題のように読めるので、「北海道の出生率は低い」それはそれで事実だからいいのですけれども、「低い数値となっている、その一因が産み育てることの難しい社会状況にある、だから結婚、出産を望む全ての人々の希望がかなえられるように、多角的に取り組みます」っていうような書き方をした方が良いのかなという気がいたします。

あと、男性の育児休業の取得につきまして、これは「率」だけではなく「日数」も問題になるのではないかと、私、前回言ったのですが、まずは、育児休業を取得してもらうところからという風に考えておられるようですので、記述の方、54 頁の方に、「ただ育児休業を取るだけではなく、日数も十分に取ることが大事だ」という含みを持たせるような記述にしていただきたいなと思います。具体的には、14 行目、「仕事と家庭の両立に向け、育児休業制度の活用促進」という言葉が書かれているのですけれども、ここを例えば「仕事と家庭の両立に向け、子を持つ親の性別に関わらず、育児休業を十分に活用することの促進」というようにしていただけると、ただ単に育児休業を取ればいいというだけではないという含みを少し持たせられるかなという気がしました。

あと 61 頁になります。様々な働き手の労働参加の促進のところで、「長期間無業の状態だった人」という言葉を入れていただいたのはとても嬉しく思います。この 61 頁 17 行目、 「全ての人、働く人々が生き甲斐を持って働く」という言葉が出ております。そして、62 頁に行くと、10 行目、「仕事と家庭が両立できる職場環境の整備を促進する」、この辺りの指標の一つとして、ワークライフバランスがどれだけ確保できているかの指標として、「共働き夫婦の夫と妻のそれぞれがどれだけ家事育児に時間を費やしているか」、そういうデータがあれば、それは一つの指標になるかなという気がしました。

そして 65 頁の 26 行目に、「固定的な性別役割分担意識が残っているこの状況を解消し、 男女が個性と能力発揮できるようにする」という方向性があるのですけれども、ここには、よく扱われる指標、「男は仕事、女は家庭という考え方への賛成、反対」、それなども使えるかなという気がします。

あと 66 頁、政策の方向性に「犯罪や非行をした人が孤立することなく社会の一員として定着できる地域社会」、この言葉を入れていただいたのは、とても嬉しく思います。以上です。

（髙橋部会長）

ありがとうございました。文章の構成というかロジックが、重要ですね。岡田委員のおっしゃるとおりなので、そのように直していただければと思います。

では次、加藤委員、お願いいたします。

（加藤委員）

まず感染症だとか、認知症、その辺のことを触れていただきましてありがとうございました。

それで私ちょっと気になったのが 30 頁を見ていただきたいと思うのですけれども、基本方向の２で「誰もが可能性を発揮できる社会」に変えたところです。31 頁のＳＤＧｓの説明のところで、３番目に福祉の関係が出てくるのですけれども、「あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活」と、ここのところだけがですね、「あらゆる年齢の」と触れています。これはどういうことを言っているかというと、赤ちゃんからお年寄りまでということもあるのですけれども、障害を持っている方ですとか、例えば認知症である方ですとか、いろんな人を全部含みますよというようなことをここで表現していると思うのです。ここだけですね、「あらゆる年齢」ってつけているのは。そうすると、ここの「誰もが可能性を発揮できる」と言ったときに、ちょっと引っかかる人も出てくるのかなっていう気がしてですね。ちょっといろいろ調べてみますと、58 頁の 33、34 行目にはですね、地域共生社会の説明で「全ての人々がお互いに支え合いながら、一人ひとりが役割を持ち活躍できる地域共生社会」と、こういうような地域共生社会の説明が入ってきます。それで、これを全部やるっていうことではなくて、もしこの「誰もが可能性を発揮できる」というところを活かすのであれば、そこに例えば「自分らしく」だとか「最大限の」とか、そういうようなことをちょっと触れていただくと、認知症になった人も、自分らしくそのまま自分の役割だとかを果たしながら、生きていくのだよという、オレンジプランがそういうような書き方をしているのですけれども、何かそういうことをできないのかなと思ったところなので、内部で御検討して無理だということであれば、それで構いません。

それから 52 頁で、「妊娠・出産の希望がかない」ということを謳っています。令和５年の厚生労働白書に、不妊に悩む夫婦の支援が一言というか、10 行くらい触れております。（原案・事務局案を）見ていくと全く触れていない。触れなくてもいい、ここでその意図を含んでいますということであれば、そこをちょっと意識しておいていただきたい。

それから、61 頁の就業・就労環境の中で、先ほど課長の説明の中にも外国人が入っているのですけれども、読んだ限りでは 61 頁には外国人が出てきていなくてですね、70、71 頁のグローバル化のところに、外国人に触れているものですから、確かにその縦割りの関係でいくと、グローバル化のところで触れるというのはあるのですけれども、同じことを触れているところも何カ所かあったので、もし軽重をかけるのであれば、ちょっと触れていただければ。

それと、もう１つ最後に、実は今、確かに能登半島の関係で、避難所の関係がよくテレビでも映っているかと思うのですけれども、73 頁の６行目で、「それぞれの状況に応じた災害情報の伝達及び避難誘導体制の整備・強化」というところとポツ（読点）がついて「感染症への対策等を踏まえた避難生活環境の整備を進めます」となっているのですけれども、文章の修文の関係でいくと、「強化」で一回切っていただいて、できれば感染症だけではなくて、「バリアフリー、プライバシー、感染症等への対策」というようなことを触れていただくと、避難生活環境の整備に繋がるのかなと思ったので。「等」で読み込んでいますというのであればいいのですけれども、その代表が感染症っていうのはちょっと、今一番重要なのはプライバシーだとかバリアフリーかなっていうところでございます。以上です。

（髙橋部会長）

ありがとうございました。

特に最後のところは、今まさに能登地震の関係でも皆さん関心を持たれていますし、明後日、北海道の強靭化の委員会が開催予定です。当然この計画とリンクしてきますし、また、いろんな形で話題になってくると思いますので、それと対応させながら考えていきたいなと考えております。

それでは川村委員お願いいたします。

（川村委員）

前回、私、ＤＸとかＡＩですとか、ＡＩの活用についてコメント申し上げたと思いますけれど

も、概ねというか色々なところにその要素を反映していただきましてありがとうございます。
まず２頁目を見ると、特定分野の計画の中に、やはり人口減少とデジタル化が入っているので、これが全体的に重要なことと位置付けられたのかなと思います。
それで 21 頁に「新たな技術の活用」ということが書かれていまして、ＡＩとかＩｏＴを使わなければいけないということは非常に良くまとめられていると思います。何で必要かという背景を、当然人口減少が背景なのですけれども、最近はよく「８がけ社会」と言われていますね。2040 年くらいに、そもそも 10 のサービスや、いろんなことを 10 で支えていた中で、あと 20 年以内くらいに８の人で支えなければいけなくなると、そういうことを考えると、人口減少や少子高齢化はそのとおりなのですが、それくらいのことを８で支えなければいけないのだという切迫感からＩＴとかＡＩを使わなければいけないということの、切迫感がこの文章では伝わりが弱いかなというところもあったので、少子高齢化だから、やらなければいけないということはそのとおりなのだけれども、もっと言うと、あと 20 年以内に８割の人で支えなければいけないということが出てくると、いいのかなと思いました。
27 頁も少子高齢化のことが書いていますけれども、これも同じようなことかなと思いました。
それから、45、46 頁で、ラピダス社とか北海道に今データセンターがたくさんできているということで、そういうデジタル関連産業ということからこの頁がまとめられていると思います。ラピダス社とか、ＧＸももちろんデジタルが絡んできますし、「Team Sapporo－Hokkaido」もいろんなことを進めようとしているので、それについてまとまっているのは非常にいいかなと思いますし、一方で 46 頁に、イノベーションを創出するとか、スタートアップを育成しますみたいな話があるのですが、私たちも実際にＡＩスタートアップを作って道内中心にいろんなことをやっていたりしますけれども、単にスタートアップを作ることというだけではなくて、それがやはり道内の色々な解決に繋がるのだ、単に本社を置く、儲かっているスタートアップができればいいという話ではなく、地域課題の解決ということで、せっかくできたスタートアップが地域社会に連携していくということをこの先に期待することだと思うので、もうちょっとそういう視点も入れたら、北海道の方々にとっても希望というか、ラピダス社もいろんなことを言われていますので、それが地域に波及するということが、単に人を取られるということではなくて、そのところから生まれる関連技術が地域を変えていくのだというニュアンスがもうちょっとあってもいいのかなと思いました。
51 頁の科学技術のところも産学連携、研究機構とか地域の課題解決をやっていくわけで、そこから産学連携が生まれていくのですけれども、これもやはり大学にいる立場からすると、我々はどうしても学術的な興味から研究をやっているところに、地域課題で何か一緒にできないかということで一部の先生がやりはじめており、また、それをそれだけに留めるのではなく、ここは道内の大学の先生とか研究者に頑張って欲しいところでもありますので、ここはもうちょっと、地域の課題はたくさんあるし、連携したいという企業の方もいっぱいいると思うので、もう少しここのところを後押しするような、地域の課題、例えば雪の問題、自動運転の話も出ていましたけれども、雪の問題とて、道外の研究者とか他の地域の人たちが解決してくれない問題だと思うので、そういう問題はやはり道内で解決していかなければいけないことを考えると、大学人としてはそこのところも、もう少し後押ししていただいて、みんながその方向性を向ければいいかなと思いました。
それから 70 頁のグローバル化もたくさん文書が修正されていて、読んで非常にいいかなと思うのですけども、ちょっとだけ付け足すと、私もいくつかやっているベンチャーの中で、ＡＩとかＩＴの研究者の外国人を雇って一緒に仕事をしております。その観点からするとどうしても道内の外国人の受入れは特定技能の労働力不足を補うために単純労働でという方々が全体的には多いと思うのですけども、一方で先ほど申し上げたように、我々のところではＡＩを研究する人たちが足りないということで例えばインド、ベトナム、バングラデシュなどいろんなところと連携して、各外国にその現地法人を作って向こうで研究開発をお願いすることもあれば、向こうから人を連れてきて、日本人の研究者と一緒に混じってやることも、実際にもうやっているし、北海道だけではなく、東京のスタートアップも人が足りないため、外国人のハイスキルの人たちを雇っ

て、どんどん研究開発を進めている例も多くなってきているので、そういう決して人手不足のところだけに外国人を充てるのだということだけではなく、ハイスキルだからそもそも日本人か外国人かに関係なく一緒にハイスキルな人を集めるということが大事かなと思うので、もうちょっとそういうニュアンスも出るといいかなと思いました。

それから最後なのですけれども、指標のところもいろいろ検討もされて、修正されているのですが、なかなかすぐに反映は難しいと思うのですが、１つコメント申し上げるとすると、全体管理にも関わるのですが、ＡＩとかＤＸが必要で８がけ社会に対応していくということで、指標を眺めると、ＩＴとかＤＸに関わりそうなところで共通のところでＩＣＴの導入と、５Ｇのカバー率くらいしか、ＩＴとＤＸ、ＡＩに関係のありそうな指標ってないのですよね。もちろん、食料自給率みたいな目標で考えると、そこにＡＩとＩＴという指標はすぐに入ってこないのですが、これを達成するためにはきっとＡＩとかＤＸとかドローン活用とかＩｏＴが必要になってくるとすると、もうちょっと指標の中にもＤＸ化とかＩＴ化とかそれを支えるエンジニアの数だとか、ぱっとこれを入れたらいいと言えないのがもどかしいのだが、もう少しそういう視点もあってもいいのかなと思いました。

（髙橋部会長）

ありがとうございました。次に佐藤委員お願いします。

（佐藤委員）

地方部でまちづくり、コミュニティービジネスをやっている立場で３点についてお話させていただきます。

まず１点目ですが、今回の修正で、全体的を通じて地方の実情に寄り添った表現が厚くなっていると強く感じたところです。また、表現が一つ一つ、もしかしたら、個人的なものもあるかもしれませんが、具体的かつ、すっきり表現されていて、読んでいながら具体的な絵が頭に浮かんでくる表現になっており、格段にイメージしやすい文章になったなと実感しております。特に 39 頁の観光、68 頁の地域づくり、72 頁や強靭化政策などは、読みながら一つ一つ頷いておりました。

２点目は、３章の章立てが良いということです。それぞれの政策に優劣をつけるということではないのですが、食と観光は他の地域と比較しても優位性の高い北海道の基礎資源であり、国への貢献度合いも大きいだけでなく、全道あまねくほぼ全ての地域において適応されるものです。そういったものがデジタルや再生可能エネルギーよりも先に記載されていることは必然であると考えています。食と観光を基礎として新しい社会構造に向けたデジタルや再エネが戦略的に織り込まれてゆくという意図を汲み取ることができました。この総合計画が広く道民に広がるためにも大切なものであると考えています。

３点目。70 頁の「グローバル化」につきまして、ここに赤文字で表記された追記箇所はまさしくそのとおりであり、素晴らしく的確な表現だと思います。それが故にただ一つ残念なのは、指標にある日常英語ができる人の割合という設定だけが少し薄くなってしまっているということです。これは、川村先生のご専門になるのですがこれからは AI の発達によって、英語の技術についての考え方が変わるものと想像しています。

例えば、先日、「葬儀の御礼」のような最も日本的表現、文化を表した日本語を Google 翻訳で英訳をして、日本文化にも精通している英語ネイティブにみせたところ、素晴らしい翻訳だと。もっとＤＸが進めば、やや極論気味ですが、今後は、英語会話のスキルを詰め込むよりも、英語圏に限らず、世界の広い文化や地理などと合わせて、その一形態とも言える「言語」を学ぶことのほうが国際化になるのではないかと考えています。

そもそも高校を卒業しても英会話ができないといったこともよく聞きますし、これまで単に英語の単語を覚えたり、文法、構文を覚えるといったスキルを学ぶそのものに使っていた時間を、文化教育、地理教育と合わせた、例えば「世界科」といったものに切り替えることのほうが目的や理にかなっていると考えています。

国際間の相互理解において最も大切であるコミュニケーションとして言語は必要ですけれど、

文化背景なども知らないと“論語読みの論語知らず”になってしまうし、海外に行って聞かれるのはむしろ日本文化だったりします。英語の試験のためのスキルや英会話技能よりも、そこは機械に任せて、そういった時間を本質的な学びの場にすることが必要だと考えています。

（髙橋部会長）

それでは、中村委員、お願いします。

（中村委員）

私からは３点お話させていただきたいと思います。まず、１点目は観光についてでございます。観光の重要性が感じられる表現を追記・修正いただいたことに感謝申しあげます。一方で、指標のところで、29 頁の重要モニタリング指標と、38、39 頁に観光の指標がございますが、29 頁の重要モニタリング指標のところは、外国人観光入込客数ということで、インバウンドを意識した設定になっております。インバウンド需要は、ご存じのとおり地政学的リスクといいますか、コロナや地域紛争であったり、非常に様々なリスクファクターがあると考えておりまして、それを踏まえて、観光が地域経済の支えになるという趣旨で捉えますと、例えば、全体の消費額を目標値に置くとか、あるいは、道経済の効果を意識できるような指標で良いのじゃないかと思います。

12 月 19 日に鈴木知事に観光の要望書を提出させていただきまして、そこでは、北海道の特徴を活かした観光施策の推進であったり、アドベンチャートラベル、人材育成、二次交通の整備など、を要望させていただきましたが、その内容も新たにしっかり反映していただいているので、良いかと思いますので、先ほどの指標のところを１度確認いただければと思います。

２点目は、56、57 頁のところに、観光とは直接関係ないのですが、いじめや自殺といった表現がここに入っております。ご存じのとおり、現在、非常に大きな社会問題ですぐにでも取り組む必要があって、目標、中間目標値には、いじめはいけないことだと考える割合が 100%となっている。それは当然のことで、重要性や切迫感がもう少し伝わるような工夫が必要ではないかと感じました。

こうした問題に直面されている当事者の方や関係者の方もこの資料を読まれる場合、目標が遠いところにあるのじゃないかと思われないようにしていただきたいというのが、私の２点目の考えでございます。

３点目です。これは、82 頁のアイヌの関連なのですけれども、前回の会議でも発言させていただきましたけれども、現在、内閣官房主管官庁が事務局となって、ウポポイ有識者会議という、ウポポイにたくさんの人が来場してもらおうという取組を行っております。ウポポイは国の施設でございますので、国の施設の目標みたいなものを、今回の総合計画に盛り込むことは検討が必要かと思いますが、私が申し上げたいのは、ウポポイの有識者会議で議論している中で、ウポポイの事は知っているけれども（ウポポイに）行ってないという割合が一定程度あるということ。これは、知っているのだけども行っていないというのは、裏返すと認知度を上げるだけでは、だめなんじゃないか。例えば、アイヌに関する本質的な理解であるとか、興味であるとか、そこから共生・共創の社会を作っていくのだというような趣旨に、我々はしっかりと進んでいく必要があるのではないかと考えておりまして、この資料にウポポイの来場者数の目標値を入れてくれ、ということではなくて、知っているだけではだめで、認知度が 100%にいくことは、道民の方々には当然のことで、そこからウポポイに行く、あるいは、アイヌを知る、一緒に、共に、世界を一緒に生きるという、そういうところの観点からもう少し、内容についてご検討いただければと思います。以上です。

（髙橋部会長）

ありがとうございました。では、水野委員お願いいたします。

（水野委員）

まずは、年末年始も挟む中、前回までの部会や市町村への照会もされ、多岐に渡る意見を反映

していただいて、原案を取りまとめてくださった事務局の皆さんにお礼を申し上げたいと思います。

私からは、これまで、原子力等の既存電源の活用によるエネルギーの安定供給やラピダスのような特定地域の大型プロジェクト効果の全道波及、また、道外からのＧＸ投資の呼び込み、属性に応じた人材育成・確保、北海道らしいＩＲの実現、スポーツによる北海道の「ブランド力」や「稼ぐ力」の向上といったことについて、意見を述べさせていただきました。

その多くについて勘案頂きまして、全体として非常に良いものにまとまってきたかと感じております。改めてお礼申し上げます。

その上で３点ほどコメントさせていただきます。

まず、エネルギーについてですが、先ほど、ご紹介ありましたけれども、16 頁にエネルギーは暮らしと経済の基盤であって、特性を活かした多様な構成とすることが重要であると、いわゆるベストミックスの重要性について加筆いただきました。これについては、エネルギーを考える上での基本的視点として重要であり、私も賛成するものであります。

一方、前回私が申し上げましたのは、ゼロカーボン・脱炭素社会の実現に向けて、再生可能エネルギーの導入拡大を図ることが重要な施策となりますが、これだけを進めるような考え方は片手落ちであり、今回策定の総合計画がそのように読み取られることは不味である、ということでございます。

即ち、国のＧＸ推進戦略ですとか、第９期北海道総合開発計画案でも示されているとおり、脱炭素社会の実現に向けて、CO_2フリーの原子力や水力の活用、CO_2排出量削減策を講じた火力の活用等によってエネルギーの安定供給を図りながら、再生可能エネルギーの導入を拡大することが求められているということを何らかの形で記載すべきということを申し上げたところでございます。

そういった点で、今回の原案をもう一度見ますと、当該のゼロカーボンに関する 41 頁は今申し上げたような趣旨での修正とはなっておらず、むしろ「『ゼロカーボン北海道』の実現に向け」との記載が 24 行目に移ったことにより、ゼロカーボン実現のために必要なことは再生可能エネルギーの拡大のみであるとの印象がより強まってしまったようにも感じるところでございます。

従いまして、改めて原案の修正について具体的にご提案させて頂きたいと思いますけれども、まず、24 行目については、「エネルギーの需給の安定を図ることが重要です。」と一旦ベストミックスに関する記述を終えて頂いた上で、それに続く記載を「また、『ゼロカーボン北海道』の実現に向けては、CO_2を排出しない原子力やCO_2排出量削減策を講じた火力など既存電源等を活用して安定供給を図りながら、本道の再生可能エネルギー利用を拡大し、～」というような流れに、ゼロカーポン実現に向けた安定供給の必要性とその手段について、ロジック的にも明確にして記載して頂ければと思います。

２点目は、各分野のＫＰＩについてでございます。先ほど、石井委員からもご発言ございましたけれども、106 頁からＫＰＩの一覧が掲載されてございますが、不確定要素が多いことや将来見通しの不透明さということから、多くの項目の目標値が現時点で「検討中」となっているのだと思います。

当然、設定の難しさはあると思いますが、「めざす姿」の実現に向けては、特に「潜在力発揮による成長」に係る指標については少し高めの水準を設定し、政策を総動員してオール北海道で取り組んでいくのが計画のあるべき姿だと思います。観光のように、コロナ禍後に策定された「観光立国推進基本計画」において今後数年でコロナ禍前を超える目標水準を掲げている分野もございますので、北海道としても頑張りがいのある指標設定をお願いしたいと思います。

最後に、これは記載の修正を求めるものではありませんが、人手不足ということについてでございます。計画原案においては、26 頁のめざす姿の中で分野横断的に推進する旨を明記しているほか、今回 49 頁に追記して頂いたことを含めて、様々な箇所において、業種毎の現状・対応や女性・高齢者・外国人等多様な人材の活躍推進について記載いただいたところでございます。しかしながら、これまでの部会でも述べさせていただきましたが、人手不足は多くの業界にとって喫緊の課題であります。今回の記載内容をもってしてもその問題の大きさというところを表現する

には十分とは言えないのかなと考えてございます。道庁としても、状況変化に常に気を配り、その時々において必要な政策や施策を総動員していただくよう、経済界として改めてお願いいたします。私からは以上でございます。

（髙橋部会長）

ありがとうございます。古地参与お願いいたします。

（古地参与）

今までこの会議でいろいろなことを申し上げてまいりましたけれども、最大限汲んでいただいて、細かな作業をいろいろしていただき、本当にありがとうございました。皆さんから来るメールの時間を見て、ご苦労されているなといつも思っております。本当にありがとうございます。

私からは、皆さんが今までおっしゃったことと重複する部分もあるかもしれませんが、多様性とかグローバル化といった視点を中心に、形式に関わる部分も含めて申し上げたいと思います。先ほどおっしゃっていた方もいましたけれども、だいぶ見やすくなってきた、しかも読みやすくなってきたので非常にありがたく思っております。図表とかグラフを入れていただいたので、色使いが華やかになっている部分もありますが、ユニバーサルデザインという考え方を取り入れると良いかと思います。色の配列、図表や文字の大きさ等も含めてですね。図表が多く入っていてちょっと小さくなって見にくいかな、という部分もありますので、御配慮いただけるとよいと思います。

見え消し版を用いて順番に最初の方から申し上げていきます。まず、「計画の性格」を「計画の位置付け」と直されていて、この計画がどのような意味を持つのかということを強調されたいのだと思うのですが、私達にとっては共通の認識があるのかもしれませんけれども、文章の中に、総合計画がこの北海道の計画の中で最上位に位置付けられているといった、最上位性を謳う言葉をどこかに入れるといいのかなと思います。

それこそ、職員の方々の共通の認識の下で、ということも書かれていますけども、知事や道議会議員の方々も含め、道職員の皆さんが総合計画を机の上に常に置いて、何かあったときには参照しながら、施策や事業が総合計画とどのような関係にあるのかということを問うていくようなものになると良いと思います。この辺りをもうちょっと強調されても良いかと思いました。

７頁ですけれども、これまでも申し上げたかもしれませんが、やはり人口の動態を見ていったときに、社会増減のところで、外国人の社会増が顕著だという話が出ています。16、17 行目では外国人の増加について触れられていますけれども、今後の道内地域社会を支えていく一つの大きな要素に外国人の方々がなっている、ということをもう少し強めに書いてもいいのかなと思いました。と申しますのは、先ほど資料１で御説明をいただきましたけども、外国人材の話が何度も出てきます。それこそ現在の人手不足の話も含めて、更には今後の経済発展や社会発展を考えたときの、より高度な人材の必要性を考えたときに、すごく大きな今後 10 年間のキーワードになっていくと思いますので、北海道を支えていただいているというような、若しくは、外国人材を呼び寄せていくというような姿勢が伝わるような書き方をしていただくとよいと思います。

ちょっと飛びますけれども、70 頁の指標ところにも繋がってくると思います。70 頁の指標では「外国人居住者数」が出ています。前回も申し上げたかと思いますけれども、やはり外国人の方々が住みやすいまち、地域、社会になっているのかというようなことをどうにかして測れないでしょうか。なかなか難しいのかもしれませんけれども、改めて考えていく必要があると考えています。もちろん、指標を取るのにコストがかかりすぎるということになると、指標として機能しないと思いますので、その辺りの折り合いの付け方はあるかもしれませんが、今後の計画推進の中で考えていくことが大事になってくると思います。

この辺りの話を更に進めますと、目標値設定の考え方のところで、これまでのペースで増加していくことを目指すと書かれていますので、北海道として、より外国人の方々に「来てください」というようなことを目指すのであれば、もう少しその辺りのことを書いた方がよいと思います。これは先ほどの川村先生の話にも繋がってきますし、水野委員の話にも繋がってくると思います

が、そこをもう少し出しても良いのではないでしょうか。
　そうなったときに、先ほど佐藤委員からもありましたけれども、英語能力を有する生徒の割合というのは、前回も申し上げたと思うのですけれど、これだけでいいのか、どうしても違和感を覚えざるを得ないところがあります。これはおそらく、道教委あたりのお考えもあるのかもしれませんが、もうちょっと工夫が欲しいです。
　外国人に関して申し上げますと、経済の話、道庁の組織で言えば経済部あたりの意向が結構あるように見えますが、総合政策部の国際課の役割があまり見えてこないところがあります。多文化共生社会を作っていくとか、より外国人の方々が暮らしやすい北海道を作っていくという点で、多文化共生施策に関してより力を入れる必要があると思います。そういう姿勢が見えてくるような書き方はないのかと思いました。
　あとは、ちょっと形式の話になるのですが、26 頁です。先ほど石井委員の方から、この辺りが読み物として重要なのではないかというご指摘がありましたけれども、【１　潜在力発揮による成長】、【２　誰もが可能性を発揮できる社会と安全・安心なくらし】、【３　各地域の持続的な発展】が全て一文で書いてあります。句点がなく説明が繋がっていて、文章としてちょっと読みにくいと思います。もうちょっと読みやすい文章になるよう、区切っていただいた方がよいと思います。
　25 頁のところですけれども、先ほど加藤委員から「可能性」の話が出ました。これは私も気になっていたところです。先ほど 30 頁の話をされていたと思うのですが、25 頁の 32 行目にも「それぞれの可能性を発揮し」という言葉がありますので、先ほど加藤委員がおっしゃっていたように、自分らしく暮らしていく、その上で「可能性を発揮していく」とか、「活躍していく」という感じでもよいのかと思いましたので、表現の工夫をしていただけるとよいかと思います。
　そこに関して申し上げますと、その前に「誰もが」という言葉があります。以前の会議で、「多様な人々」と言ったときに誰をイメージするのかということで、他の委員の方々からもイメージしにくいというご意見が出ました。女性、高齢者、外国人と、いわゆる社会においてマイノリティになっている人たちのことを意味していましたが、これを消して「誰もが」としてしまうと、多様性やマイノリティを重視するという意味合いが消えてしまう可能性があります。全ての属性を述べられないということはあるかもしれませんが、表現の工夫をされた方がいいと思います。
　今まで北海道において何らかの生きづらさを抱えていた人たちが、より生きやすくなる社会を作っていくのです、ということを言うとき、その方々のことを具体的に挙げていくことが重要なことだと思います。「誰もが」と言うと、マジョリティも全部入ってしまうので、意図するところがぼやけてしまうところもあろうかと思いますので、ぜひ工夫いただければと思います。
　この点に関連してさらに申し上げると、66 頁の 25 行目に「人権に対する理解や配慮ある行動を促進します」とありますが、人権は「配慮するもの」なのでしょうか。いろいろな考え方があるところかとも思いますが、「配慮」となると「配慮しない」という選択肢もあり得るという含みが出てしまいます。マイノリティからすると、マジョリティが配慮するかどうかみたいな話になってしまう可能性があります。人権は、守られる、尊重されることが前提なのだということを述べていただいた方がよいと考えます。「配慮」だと表現として弱いのではないかと思いました。
　さらに申し上げますと、69 頁ですが、指標に「北海道への移住相談件数」とあります。件数が増えるのはいいことなのかもしれませんが、移住相談があってその後どうなったのかというところが一番重要だと思います。データが取りにくいとかそういうことはあるのかもしれませんけれども、もうちょっと工夫があってもいいと思いました。
　以上です。

（髙橋部会長）
　ありがとうございました。皆様から、各専門分野についていろいろご指摘いただきました。事務局から今お答えいただくことはありますか。
　個別にお答えすることはありませんか。

（事務局からなし）

それでは、私もいくつか、大きな点で話をさせていただきます。

１点目は、今、古地参与からもお話のありましたとおり、２頁目の計画の位置付けに関しての記述をもう少ししっかり書いていただきたいと思います。

まさに、一番上位に位置付けられる総合計画は、ある意味、北海道のこれからの政策の方向性を示す憲法みたいな位置づけにありますよね。その下に、いろいろ特定分野別計画もあり、個別の地域計画もありというところで、まず机の横に置くバイブルみたいな計画なのです、というような表現が必要なのかと思います。

これは決して道庁の職員の皆様が見るだけではなくて、関係する行政の方、地方自治体の方、関係機関の方も見るということを意識して書いていただくということを考えると、先ほどのユニバーサルデザインの話ではありませんけれども、より見やすい形、文言を含めて、細心の注意を払っていただくことが必要かと思います。

前回の総合計画では、道民に対するメッセージ性ということで、パンフレットも作っております。多分今回もそのような形で、道民の方たちにより深く知ってもらうための方法も考えるということになると思います。そのときのためにも、是非２頁目の「計画の位置付け」も含めてしっかり書いていただきたいと思います。

２点目は指標についてです。見え消し版の 29 頁に重要モニタリング指標というものがあります。これに関しては、計画の進捗状況を総合的・統合的に見るための指標という形で今回挙げていると思います。さらに、この指標をモニタリングすることが、この計画の目指すべき姿にどう繋がっていくのか、北海道民の生活がどういうふうに変化していくのか、更には海外にどういうインパクトを与えていくのか、まさにこの計画のめざす姿が、北海道が世界を変える、地域を変えるというところとこれら重要モニタリング指標がどう関連しているのかということを、内容も含めてしっかり書いていただきたいと思います。

当然、指標ですから、数字として表現しなければなりませんが、数字は数字として表されていても、その内容、生活がどう変化していくとこの数字が上がっていくのか、という中身の話を書いていく必要があるのだろうと思います。

具体的にモニタリング指標を見ると、今まで皆様からいろいろ御意見をいただきましたので、それも含めて今後検討していく必要があるのだろうと思いますけれども、「検討中」となっている道内総生産、これはやはり、道としてめざすべき姿を表す重要な指標だと思いますので、次の委員会では「検討中」を取って、是非挙げていただきたいと思います。

あとは、やはり豊かさということを考えると、健康寿命ですね。この指標も全国的に数字としては低いところなので、少なくとも全国と同じようなレベルにするようなことを考えていく必要がある、と指標を捉えることが必要だと思います。

あと、社会増減がありますよね。見え消し版の 68 頁を見ると、目標値がゼロなのです。社会増減がゼロってどういうことなのだ、と。確かに人口はどう考えても減少しているところがあるので、その中でプラスマイナスをどう考えていくのかというところがありますけれども、ここのところは、数字になるかどうかは別にして、少なくともプラスの方に行くということを指標の中にも書いていく必要があると思います。

あと、これは重要モニタリング指標だけではなくて、他の指標についても言えることなのでけれども、先ほどどなたかもおっしゃっていたと思いますが、どうしても目標値を立てにくい目標もあると思います。しかし、10 年先の目標は立てづらいので立てない、設定しないということではなく、少なくてもこの計画に関しては、５年ごとにしっかりと見直すということになっていますので、少なくとも５年先はどうなっているか、10 年先からバックキャストでもいいですし、５年後はどうなっているかということを、指標として必ず書いていただく方向で考えていただければと思います。どちらにしても、目標値の目的化にしないためにも、その目標値の持つ意味、意義をしっかり感じられるような文章をどこかに入れていただければ、特に重要モニタリング指標

に関しては入れていただければと思います。
　さて、私からの意見も含めて、皆様からいろいろな意見いただきましたが、１章から３章に関して、追加で御意見があればいただきたいと思います。
　古地参与、お願いします。

（古地参与）
　形式的なところなのですけれど、例えば52頁ですけども。これ他の場所でもそうなっていると思うのですけど、現状と課題の対応方向って言ったときに、黒ポツ「・」のものがたくさん並んでいます。一部１行開いていますが、何かのまとまりを作っておられるのでしょうか。意図がわかりにくいので、意味があるのであれば分かるようにしていただきたいなと思います。以上です。

（佐々木計画推進課長）
　政策の方向性、今、現状・課題と対応方向があって、その後に政策の方向性という政策の記述がありますけれど、そこの黒い四角「■」が小項目にあたる部分だと思いますけれども、それを意識して、制作のカテゴリーがちょっと変わってくるという趣旨じゃないのですけども、そういうことを意識していますけど。先頭から読んでいくので、なんだろうなというご指摘だと思いますけども、わかりやすい標記について、検討したいと思います。

「原案第４～５章」

（髙橋部会長）
　それでは、残りの４章５章について、全体を通してでも結構ですので、御意見いただきたいと思います。これは、個々の委員ではなくて、挙手していただいて、御意見ある方はいただきたいと思いますが、どなたかいらっしゃいますか。
　川村委員、よろしくお願いします。

（川村委員）
　私は、地域のいろいろな課題など、そういうことを把握しているわけでもないですし、また、いろんな検討があって作られたと思うのですけれど、ざっと見た所感で、コメントを述べさせていただくと、最初に人口減少ということが出てくると、先ほどの８がけ社会というお話を申し上げたのですけれども、そうすると言い方がちょっときついですけれども、やっぱり撤退戦のようなことを考えなければいけない。全道とか、マクロでパイが大きいところが減っていく人数が当然同じような割合で減っていったとしても、また、いろいろなものが持つ状況でもあるので、もう少し考える余裕があるかなと思うのですけれども、人口が少ない地方、地域であれば、８割減っただけで、これまで持っていたものが持たなくなるということはたくさん起こってくると、いろいろな社会サービスは、８割になったからといって、８割の規模になるのではなくて、例えば、民間が支えているようなサービスは、損益分岐点が終わった時点で、それはもう継続できないというのは交通だったりとか医療だったりとか起こるわけです。そう考えて眺めたときに、当然プラスのこととマイナスのことがあるはずなのですけれども、全般に、いつもプラスを頑張ろうみたいなことはたくさん書いてあるのだけども、やっぱり、諦めなければいけないことなどをメリハリ付けるというようなことを考えないと、残すものは残す、発展させるものは発展させる、諦めるものは諦めるというようなことも考えていかないと、上手に撤退戦ができないのではないかなと考えると、なんとなく、プラスの面というか伸ばそうという面ばかりになっているので、10年後ぐらいを考えたときには、やっぱりその意識というのは、きついようですけど示さないとなかなかいけないのかなと。
　それから、これもいろいろと検討されていると思うのですけど、交通の問題とか医療の問題と

かいろんな問題を特に考えると、ここで地域を挙げていろいろそれぞれ戦略というか作戦を書いていますけれども、その実際に移動とか医療というのは、この分け方だけではない考えが必要になってくるところもあると思うので、そこのすり合わせというか、そこの機能というのをどう考えるかなというのは、若干見えにくいのかなと思ったので、その辺り、少し付け加えてもらいたい。

それから、もう一つは、５章の計画の推進ということで、これは道庁の皆さんが、どういう形で進めていくのかなということの進め方がわかりやすく端的に書かれていると思うのですけども、当然、道庁の職員の皆さんが、計画を推進することに関わる方々も当然８がけになってくるということは、多分、この計画の推進自体もこれまでのようなやり方では段々回すのが難しくなってくると。特にいろんなところでお話を聞くと、やっぱり統計情報が上がってくるのが遅いとか、北海道の各市町村でデータ化するときの粒度が違うとか、いろいろ話を聞くと人がいないからとかという話になってくるのですけども、だから、これ全体を進めるよりも、ちょっと前のコロナのではなくて、やっぱりこの中にもＤＸとか効率化を進めて、少ない人数になっても計画をいかにスムーズに進めるのか、多分、いろいろな民間の方々は、必要に迫られてだと思うのですけれども、是非道庁が率先して進めることに関しては、やっぱりお手本じゃないですけれども、いろいろ方々に先駆けて、進めるのに効率的に、何がどうやって取り入れられるのかというのは個別のことなのでちょっとなかなか難しい部分もあると思いますけれども、是非、この計画をスムーズに進めるようなＤＸの観点というのもあってもいいのかなと思いました。以上です。

（髙橋部会長）

はい、ありがとうございました。大変重要なご指摘だと思います。特に撤退戦のときには、みたくないものをしっかり見なければいけないというのを、数字に表していけないなと、それは、私も同じ問題意識を持っています。

あと、二つ目の圏域の話は、87～88 頁のところの連携地域別政策展開方法やこの連携事業よりこの辺りをどう考えていくのかとか、あとは、交通圏とか商圏とか、この上にいろいろなレイヤーが重なってきます。この受け取りとして、その地域、広域地域連携、さらに総合振興局単体ではもうやっていけないというのはもうわかっているので、その辺りの連携を今後より強化していくというような書き方は、是非中に入れていただければと思います。ありがとうございます。

その辺り、４章、５章、計画の進め方、地域づくりの基本方向で御意見いただけますでしょうか。

（古地参与）

今の川村委員のお話に繋げて申し上げたいと思います。初めの方に、振興局別の道内人口の推計が出ていて、その中で、石狩振興局管内に集中している、とりわけ札幌への集中ということだと思うのですが、この傾向をどのように評価しているのかということが書かれていません。書けないのかどうかわかりませんけれども、今の川村委員のお話に繋げていくと、この一極集中を是とするのか、非とするのかという判断は、もう避けられないと思います。一極集中に対しての評価を示し、何らかのアクションを起こすのか起こさないのかという政策判断は、まさに、広域自治体としての北海道庁に問われていると思います。

渡島、檜山を含めて細かい振興局別のデータがありますが、こちらに関しても、是なのか非なのか、価値観は一切書かれていません。書かないということなのかもしれませんが、地域経営ということを考えたときには、それこそ重要モニタリングの指標に入りうる可能性もある重要なポイントなのではないかと思いました。

一極集中を進めていくという政策の方向付けもあるでしょうし、そうではないという形もあると思うのですが、そのあたりがわからず、読んでいてずっとモヤモヤしているところではありました。

それと、渡島・檜山の道南連携地域のところについては、前回も申し上げた部分をご検討いただきありがとうございました。特に「かけはし」というところが、何を意味しているのかという

点に関して、地域戦略課の皆さんでご検討いただいて、本州と北海道の「かけはし」という形で書いていただきました。わかりやすくなったと思います。一方で、地域づくりの方向性のところで、本州との関係に関する記述がありません。本州と北海道の「かけはし」としての道南というのはわかるのですけれど、具体的に何をしていくのかというのが、地域づくりの方向のところで述べられると、振興局の皆さんも動きやすいのではないかなと思います。道民としても、その辺りを意識しやすくなると思っています。以上です。

（髙橋部会長）

はい、ありがとうございました。大変重要なご指摘でした。なかなか、是なのか、非なのか、札幌は、あくまでも北海道のエンジンですよね。そのエンジンを否定することにはなりませんね。北海道と九州と比較すると、九州はいくつかエンジンがあって、個々のエンジンで動くこともあれば、時には福岡が中心という形で、九州が一体になるところもあります。ですので、ここでは、少なくても、これだけの広域の北海道ですので、札幌の次のレベルの都市はしっかりとやっていかなければいけない、というところはここに書いていく必要はあるかなと思います。なかなか難しいかもしれません。少し議論させていただきたいと思います。

その他、ございますか。地域のあり方、さらには計画の推進に関して。佐藤委員、地域としていろいろ活躍されていますけれど、何かご助言いただければ。

（佐藤委員）

ありがとうございます。ご指名いただきましたので、一言。まず、地域に関しての記載は、僕の関わっているエリア内は、キーワードや、実情を踏まえた表現、地域の実態が記載されていることが見て取れます。各振興局からしっかりと情報を収取、反映されていることがわかりますので異存はございません。

一つ加えるとしますと、繰り返しになりますので、敢えて言う話ではないのですけれども、道北、道央などの括りで、本当に連携が取れているのだろうかと常に疑問が残るところです。こういったエリア割に現状や合理性を感じられません。北海道はやはり札幌からハブのように広がっているという意識が非常に強いものです。エリア内の連携は絶対取った方がいいのですけど、取るのであれば、もう少し具体的に進めなければいけないなと地域の人間としても考えておりました。

最後一点、100 頁の、古地先生もおっしゃっておられた、この文書の立ち位置、位置付け、例えば、常に自分の机の脇に置いておく、というような表現をされておられましたけれども、４章の最後の計画推進体制に、加筆いただいたところではありますが、この計画の趣旨内容を十分に理解するようお努めるとともにということは、努めるだけでいいわけではなくて、これは今まで理解していなかったのとなってくるものですから、ここは、むしろ最初の方に、この文書の位置付けとして、記載される方がポジティブなイメージになるかなと。あくまで表現の違いですので、ちょっとここだけもやっと残ったものですから、一言発言させていただきました。以上でございます。

（髙橋部会長）

はい、ありがとうございます。その他、４章、５章、全体を通じて御意見がありましたらいかがでしょうか。

（古地参与）

今の佐藤委員のお話とつながる部分ですが、道職員の方々がこれを理解して、この実現に向けて邁進するという表現を入れていただけるといいかなと思いました。ただ、道職員だけがすればいいよねっていう話ではもちろんなくて、500 万以上の道民１人１人が考えていくっていうことが重要ですので、何か道民に対するメッセージみたいなものを最初に入れていただいてもいいのかもしれないですね。今回の案のように最後の方だけではなくて、計画の位置付けあたりにもです

ね。つまり、これは道庁だけが作っているものではありません、皆さんと一緒に育てて行く計画なのですよというメッセージですね。まさに道民のバイブルという話にもなると思うのですけど、道職員だけではなくて、道民のバイブルとして、皆さんがこれを一緒に 10 年かけて育てていく。その中でもちろん修正していくところも出てくるでしょう。それこそ、厳しいところを一緒に見ていかなきゃいけないということにもなると思います。さらに、これを、道民の方々が自分ごととして、もしくは自分たちごととしていただくために、こういう計画をやっていて、今皆さんの暮らしはどうですかみたいなことを、道民の意見を聞く機会、もしくはディスカッションをする機会を設けられると良いと思います。今回の計画立案にあたって、学生も含めて道民の意見を聞くということをされていましたが、そういうことを、政策実施の段階に入っても引き続き行っていけると良いと思います。もちろん、皆さんが疲弊するような形で実施する必要は全くないと思いますので、できる範囲で、様々なテクノロジーを使いながら、そういうことをやっていくことが大切ではないでしょうか。何か作るときにはいろんな人の話を聞くのだけど、その後、実行する段階になると、途端にそういうものが無くなりますというようなことがよくあります。この計画を議論する道民会議みたいなものを作っていって、この計画を作る議論の中で出てきた、様々な背景や特性を持っておられる方々にも関わっていただけるような形で計画の実施状況を検討していく。議論していくということがすごく大事なのではないかなと思いますので、そういう機会を是非作っていただけるとありがたいと思います。以上です。

（髙橋部会長）

ありがとうございます。そのほかございますでしょうか。よろしいでしょうか。時間も経過いたしましたので、議題１「新たな総合計画　原案・事務局案」に関して、皆様の御意見伺いましたので、皆様からの意見をまとめるという形にならないかもしれませんけれども、いくつか感じたことを述べさせていただきます。

まず、１点目として、北海道のめざす姿。これに関しては、前回から色々皆さんから御意見いただいて、この方向性でめざす姿は問題ないと思います。北海道のめざす姿とともに、計画の位置づけがまだ明確ではないとの御意見をいただきました。その当たりを是非わかりやすいように書いていただければと思います。わかりやすいというのは、２つの観点があると思っていて、１つは、前回もお話しましたとおり、ロジカルにわかりやすい、論理が飛躍していないかというのが、ます１点だと思います。それに関して、先ほど、皆様からいろいろ御意見いただきましたので、それを含めて直して行きたいと思います。もう一つは、さきほど古地参与がお話していただいたように、この計画に関係する道民１人１人、関係の方たち皆さんにわかりやすく書き示すことだと思います。これまで文章をしっかり書いていただきました。今後読み手を想定した際に、道の職員を含め関係する方たちだけではなく、道民 1 人 1 人、例えば学生も含めて読まれるとなると、これまで以上に見やすさや、ユニバーサルなデザイン、章立て、字や色の使い方も含めてしっかり検討する必要があると思います。今までのように、関係機関の方たちだけが見るという時代ではありませんので、少なくとも５００万人の道民がしっかり見て理解できるわかりやすさを、めざす姿を含めて書いていただきたいというのが、１点目です。

２点目。政策展開の方向性及び指標に関しては、今回特に、重要モニタリング指標というのを出していただきました。これに関しては、まだ議論の余地があるところだと思います。モニタリング指標で計画の進捗を確認することは、とりもなおさず、この計画の実施によって、道民の生活が、どういう方向になっていくのか、どう変わって行くのかと同義であるということをしっかり書いていただきたいと思います。最後の地域づくりの方向性に関しては、まさにこれから地域においてこの計画が実施する際に、どういう形で進めていくのかということを書いているところです。これも最初お話したとおり、実施するのは総合振興局の方だけではなく、地域住民の方も含めて道民全体でと思います。これから計画は、道民の参加と貢献がないと、これ以上進まないと思います。その参加と貢献をどうやってしていただくのか、それも含めて地域の方向性をしっかり書いていくことができればと思います。

今回いろいろ私の意見も含めて皆様から御意見いただきました。検討中となっている指標もあ

りますので、それに関しては、速やかに、原案・事務局案の修正と追加を行うということを是非事務局にお願いしたいと思います。特に、指標の中間目標、目標値がないところもありますので、それを是非、立てていただいてわかりやすく示すということが、今後の点検、計画の評価の実施に対して重要なものになっていきますので、是非目標値を設定していただきたいということは、希望としてつけ加えさせていただきます。

２月１日に本委員会がございますので、原案については皆様から今回いただいた御意見も含めて、事務局と私の方で再度検討して設定していきたいということを考えておりますが、部会長に一任していただくということでよろしいでしょうか。

（一同首肯）

はい、ありがとうございます。

それでは、今、ご了承いただきましたので、中身の記述も含め指標に関しては、事務局と調整の上、２月１日の総合開発委員会に向けて取りまとめていきたいと思います。

議題（２）「その他」

（髙橋部会長）

それでは、議題の１に関しましては終了いたしましたので、議題の２その他について何か事務局からご用意いただいているものは、ございますか。

（佐々木計画推進課長）

事務局からは、今後の日程については、先ほどお話しもありましたけれども、本日の計画部会への御意見を踏まえまして、２月１日に第３回北海道総合開発委員会を開催いたします。まず、それに向けて、検討を進めていきたいと思います。引き続きよろしくお願いいたします。

（髙橋部会長）

皆様から何か、全体を通じて、発言はございますか。それでは、本日用意いたしました議事はすべて終了いたしました。会議の円滑な進行にご協力いただきましてありがとうございました。それでは、進行を事務局にお返しいたします。

（佐々木計画推進課長）

髙橋部会長をはじめ、委員、参与の皆さま、ありがとうございました。閉会にあたりまして、三橋部長からご挨拶申し上げます。

（三橋総合政策部長）

長時間のご議論にありがとうございました。改めてお礼申し上げます。また、髙橋部会長におかれましては、議事進行いただきました。本当にありがとうございました。

本日は、新たな総合計画の原案の事務局案のたたき台について様々な観点からご議論いただきました。本当にありがとうございます。

今日は、個別にいろいろ御意見を頂戴しました。私ども持ち帰りまして、一つ一つ検討させていただきたいと思っております。

また、全体的な部分としての御意見で、重点モニタリング指標のお話も頂戴しました。今回原案、事務局案で初めて出させていただきました。指標の選び方ですとか、目標の数値のあり方ですとか、あるいはその考え方という観点で御意見をいただきましたので、こういった部分を、またこちらの方も整理させていただきたいと思います。

また、もう一つ全体的な部分に関してはですね、この総合計画の位置付けをもっとはっきりと書くべきなのではないかと、我々の道庁内だけではなくて、道民の方々に対してのメッセージ性

という部分でも、もっとわかりやすく打ち出していくべきじゃないか、という御意見を頂戴いたしましたので、そういった部分も、もしかしたらこの後に出していく、前書きというのが、最初に入ってくると思うのですけど、そういった部分になるかもしれませんが、とても大事なご指摘なものですから、そういったものを冒頭に見ていただけるようにしたいと思っております。

めざす姿の二つの柱のうちの一つが、一人ひとりが豊かに安心して住み続けられる地域を創るで、メッセージのめざす姿を掲げているものですから、住み続けられる地域というように、読んでいただいた道民の方々、特に若い方々が、感じていただけるような内容を作り込まなければならないなと、改めて感じましたので、そういったことも含めて、今日いただいた御意見、持ち帰らせていただいて是非、整理させていただきたいと思います。その上で、髙橋部会長と協議させていただきまして、2月1日の総合開発委員会の開催が予定されておりますので、さらに、この場でも、ご議論、ご審議いただきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

委員・参与の皆様には、引き続きご協力をいただきますよう申し上げまして、簡単ではございますが、お礼のご挨拶とさせていただきます。

本日ありがとうございました。

（佐々木計画推進課長）

以上をもちまして、令和５年度第３回北海道総合開発委員会計画部会を閉会いたします。

本日は、長時間に渡り、誠にありがとうございました。

（閉会）